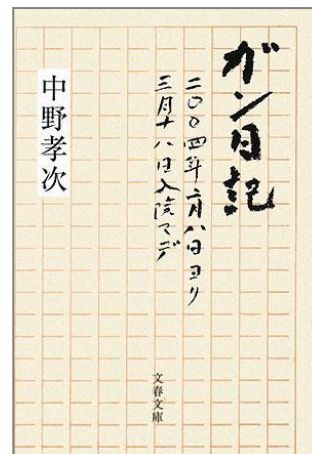


● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

ガン日記 ー二〇〇四年二月八日ヨリ三月十八日入院マデー
中野孝次著 文藝春秋(文春文庫) 2008年11月初版
(単行本 2006年10月 文藝春秋刊)



はじめに

まず、本書に収められている、高橋一清氏の「文学者の真実の記録」より。『中野氏は大正十四年一月一日、千葉県に生まれる。東京大学文学部独文科卒業。カフカ、ノサックなど現代ドイツ文学の翻訳のほか、小説、評論の多くの作品を著した。主な著書に「ブリューゲルへの旅」(日本エッセイスト・クラブ賞)、「麦熟るる日に」(平林たい子賞)、愛犬との生活を感動的に描いた「ハラスのいた日々」(新田次郎文学賞)、バブル崩壊後の世相の中で日本人のあるべき姿を説き、流行語にもなったベストセラー「清貧の思想」、「ローマの哲人 セネカの手紙(日本芸術院賞および恩賜賞)など。

中野氏は昭和と平成の世を真摯に生き、文学者として言行一致の生活を貫き、簡素な暮らしの中で、心の豊かさを求めた。「知」が「徳」とともにあった稀有な人でもあった。この「ガン日記」は、人がいかに生きるかを考えるとき、文の力、言葉の力がどれほど支えとなるかを示す、文学者の真実の記録である。』

私も、「いかに生きるか」、心構えを教えられた。私は、がんと告知された時、再発が疑われた時、今では恥ずかしくなる程狼狽した。これは、自分に「知」「徳」ともに欠けていたためだ、と本書に教わった。よって今回、この本を紹介する。

中野孝次先生のご病歴等

2004年2月初旬、体重減少、および、胃上部から背部にかけて鈍痛を自覚される。
同年2月12日、旧友の診療所にて胃カメラ施行。17日、食道ガンと診断される。
26日、S病院受診。腫瘍が粘膜下層に浸潤し、リンパ節転移が疑われるため、内視鏡的切除術の適応はなく、79歳という年齢を考慮すると、手術もできない、と告げられた。
3月3日、S病院で、化学放射線療法を受けると決められ、3月18日から4月30日まで入院され、同療法を受けられた。体力が落ちたため、6月初旬、鎌倉の七里ガ浜にある、聖テレジア病院に入院。海の見えるきれいな病室で療養され、7月16日、永眠された。最期まで、精神、気力、魂が衰えることはなかった。

本書の内容・感想

2月19日、D病院を受診された。「で、もしいかなる方法もないとすると、あと生きるのはどのくらいです?」と尋ねられた。Yという若き医師は、「あと1年ですね」とオウム返しに答えた。それから、2日後の二月二十一日の日記は、私の心を揺さぶった。抄出する。

『二月二十一日(土)
四時半起き、机に向う。食道ガンの告知ありしは十七日にて、あれよりまだ五日しかたっていないことに驚く。この五日は恐ろしく長き五日なりき。
ただ事態を比較的平静に受けとめ得たるは、前にも記せし如く、ここ数年もっぱらセネカと唐代禅僧の語録に親しみ、死に対する心構えをしてきたことによる、と思う。
ー誰かに起こりうることは、誰にでも起こりうるのだ
とセネカは「マルキアへの慰め」に言う。誰かがガンにかかったのなら、あなたもガンにかかりうる、そ

れをなぜあなたは自分にだけはそんなことが起らないと思っていたのか。

このセネカの考え方が身についていたのだ。

また「徒然草」のいつも口中に唱えている言葉も、わが心をしゃんとさせるに役立っているようだ。

一若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり、今日まで遁れ来にけるは、ありがたき不思議なり

自分を力づけるのは、キリストでも仏でもなく、こういう言葉だ、言葉の中にある真実だ。

まだ前にずっと命がつづいているような気がしていた時と、残り一年と限られた時とで、別に生きる心掛けに変ることはない。前々から、生きるのは今日一日、「今ココニ」の時空しかないとして生きてきた。これが生涯かけて文学をやって来て最後に得たものだ。生きるのは「今ココニ」しかないと覚悟すれば、先に時があるかないかは何の変りもないわけである。

人の生きる時は「今ココニ」だけ、これは唐代禅僧のだれもが実行した生であり、ローマのセネカが言うところでもある。セネカはほうぼうで、自分はその日その日を最後の日として生きている、と言っている。あだな望みがその日まではと設定した可能な未来に時を合わせて生きているのではない。だからあと数年を仮に与えられても、それを辞退はしないが、その延長期間がどこで中断されても文句は唱えない、と。

セネカの「ルキリウスの手紙」を部分訳しているあいだに出会った、この言葉に感銘し、自分もそういう心掛けで生きようと努めてきたのだった。今、その延期間が打ち切れようとしている時に直面して、あらためてセネカのその言葉を心に言い聞かせる。

セネカは、人生がどこで打ち切れようとも、わが幸福なる人生は何一つ欠けるものはないと言い切る。

そして別の所で、幸福なる人生とは何かと問い、それは、

一心に不安がないこと、不動の内的な平安があることだ。

と言っている。

わが身に願めて、そう言い切る自信があるかどうか。』

セネカは、二千年前のローマの文人であり、徒然草は、鎌倉末期の随筆である。二千年前に「誰かに起こりうることは、誰にでも起こりうるのだ」と説かれ、徒然草の中に、「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり、今日まで遁れ来にけるは、ありがたき不思議なり」と書かれていたとは。最近、軽んじられる傾向にあるが、やはり、教養とは大切なものだ、と痛感した。「不動の内的な平安」とはほど遠い粗野な人間であるが、「人の生きる時は、今ココニだけ」は、私にも実行できる。「人の生きる時は、今ココニだけ」。

この言葉が、私へのお年玉であった。



理事 井上 林太郎